

万葉集卷頭歌の形成

— 中国採桑文学との比較 —

曹 咏梅

一 はじめに

『万葉集』の卷頭を飾るのは、雄略天皇の御製歌である。春の岡辺で菜を摘む女性に求婚をする王の姿が詠まれており、古代の儀礼的歌謡の性格を持つものと言える。

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岳に 菜摘ま
す兒 家間かな 名告らさね そらみつ 大和の国は おしな
べて われこそ居れ しきなべて われこそ座せ われこそは
告らめ 家をも名をも (卷一・一)^①

この御製歌は、『万葉集』の卷頭歌であることもあり注目を浴びて、多くの論議がなされてきた。ここに代表的な説を簡単に紹介すると、鎮魂歌説、倭の県の献菜の儀礼説、聖婚歌謡説、求婚の歌曲説、歌垣の場における求婚説、また演劇の場における舞踊の歌詞説、などが^②ある。そのなかで中西進氏は中国採桑文学との関係の中から、

採桑説話の源には、擬えていえば『菜摘み説話』ともいふべきものがあつたと考えられるのであつて、これが雄略の卷頭歌の背景であつたろうと考えるのである。「中略」楽府が民謡から材をとつて新曲を作つたものたる事はいう迄もないが、同様の経路は万葉にもあつたであろう。詩経より楽府へという経路は民謡より卷頭歌への経路と全く等しいものである。そして積極的にこの歌をこの形に仕上げ、万葉の卷頭歌に据える心理には、この陌上桑らの楽府の影響があつたといふべきであらう。^③

と述べて、「卷頭歌は以上述べた如く、採桑説話的民謡が楽府詩の影響を契機として、宮廷に天武、持統の頃に蘇生し、雄略の人間像と結びついて出来上つたものといえよう」(同上) というように、菜摘み説話的民謡が背景にあり、楽府の影響を指摘した。なお、中西氏のこの指摘は今日ほとんどかえりみられることがないが、本稿では主に菜摘みの習俗に注目し、中国採桑文学を通して卷頭歌が形成される基盤を考えてみたい。

二 卷頭歌と採桑説話

卷頭歌は、大和の国を支配する天皇が菜を摘む乙女に求婚をする

という内容の歌である。一般に「名告らさね」までを前半、「そらみつ」以下を後半と分ける。前半は丘で菜を摘む乙女に家と名を問う場面で、後半はそらみつ大和の国を支配する「われ」が名を告げる場面になっている。中西氏は、この巻頭歌に楽府「陌上桑」との関係が見られると言う。「陌上桑」は「日出東南隅行」「豔歌羅敷行」とも呼ばれ、『宋書』樂志や『玉台新詠』あるいは『樂府詩集』に見える。『樂府詩集』には「魏、晋樂所奏」とあることから、魏と晋の宮中の音楽として伝えられたことが知られる。「陌上桑」の由来について『樂府詩集』は晋の崔豹の「古今注」を引き、次のように説明している。

「陌上桑」者、出秦氏女子。秦氏、邯鄲人有女名羅敷、為邑人千乘王仁妻。王仁後為趙王家令。羅敷出採桑於陌上、趙王登台見而悦之、因置酒欲奪焉。羅敷巧彈箏、乃作「陌上桑」之歌以自明、趙王乃止。⁴⁾

崔豹の「古今注」は、楽府の「陌上桑」の由来を、これは秦氏の女子から出たと言ひ、秦氏とは邯鄲の羅敷という女子で、彼女は邑人の千乘王仁の妻であったと言ふ。王仁は後に趙王の家令となり、羅敷が陌上で桑を摘むのを趙王が台に登って見て喜び、酒宴をして奪おうとした時に、羅敷が彈箏して「陌上桑」を作つて自ら明らか

にすると、趙王はすなわちやめたと言ふ。詩は以下のようにある。

日出東南隅、	日は東南の隅に出で、
照我秦氏樓。	我が秦氏の樓を照らす。
秦氏有好女、	秦氏に好女有り、
自名為羅敷。	自ら名づけて羅敷と為す。
羅敷喜蠶桑、	羅敷蠶桑を喜み、
採桑城南隅。	桑を採る城南の隅。
青絲為籠係、	青絲を籠係と為し、
桂枝為籠鉤。	桂枝を籠鉤と為す。
頭上倭墮髻、	頭上に倭墮の髻、
耳中明月珠。	耳中に明月の珠。
繡綺為下裙、	繡綺を下裙と為し、
紫綺為上襦。	紫綺を上襦と為す。
行者見羅敷、	行く者は羅敷を見て、
下擔捋髭鬚、	擔を下し髭鬚を擔り、
少年見羅敷、	少年は羅敷を見て、
脱帽著幃頭。	帽を脱して幃頭を著はす。
耕者忘其犁、	耕す者は其の犁を忘れ、
鋤者忘其鋤。	鋤く者は其の鋤を忘る。
來歸相怨怒、	來たり歸つて相怨怒するは、

但坐觀羅敷。

但羅敷を觀るに坐す。

使君從南來、

使君南より來たり、

五馬立踟躕。

五馬立つて踟躕す。

使君遣吏往、

使君吏を遣はして往かしめ、

問是誰家姝？

問ふ是れ誰が家の姝ぞ。

秦氏有好女、

秦氏に好女有り、

自名為羅敷。

自ら名づけて羅敷と為す。

羅敷年幾何？

羅敷年幾何ぞ、

二十尚不足、

二十尚ほ未だ足らず、

十五頗有餘。

十五頗る餘り有りと。

使君謝羅敷：

使君羅敷に謝す。

「寧可共載不？」

寧ろ共に載る可きや不やと。

羅敷前置辞：

羅敷前んで辞を置く。

「使君一何愚！」

使君一に何ぞ愚なる。

使君自有婦、

使君自ら婦有り、

羅敷自有夫。」

羅敷自ら夫あり。

東方千餘騎、

東方の千餘騎、

夫婿居上頭。

夫婿上頭に居る。

何用識夫婿、

何を用つて夫婿を識る。

白馬從驪駒。

白馬驪駒を従ふ。

青絲繫馬尾、

青絲を馬尾に繫け、

黄金絡馬頭。

黄金を馬頭に絡ふ。

腰中鹿盧劍、

腰中の鹿盧の劍は、

可直千萬餘。

千萬餘に直す可し。

十五府小吏、

十五にして府の小吏となり、

二十朝大夫。

二十にして朝の大夫。

三十侍中郎、

三十にして侍中郎、

四十專城居。

四十にして城を専らにして居る。

為人潔白皙、

人と為り潔白皙、

鬢鬢頗有鬚。

鬢鬢として頗る鬚有り。

盈盈公府步、

盈盈として公府に歩み、

冉冉府中趨。

冉冉として府中に趨る。

坐中数千入、

坐中の数千入、

皆言夫婿殊。

皆言ふ夫婿は殊なりと。

詩は三節に分かれる。一節は、城南の桑畑で桑を摘む羅敷の美しさを言うもので、人々は彼女の美しさに見とれて仕事を忘れるほどであると言ひ、二節は、国の太守がやってきて羅敷を見て使いを出し、羅敷の出身や年齢などを聞いて誘う内容であり、三節は、羅敷が自分の夫は東方の千餘騎の軍隊にいて、いかに出世したかを述べて太守の誘いを拒む、と言う内容である。

「陌上桑」の由来の説明と詩について見ると、羅敷に寄りかかる

男を「古今注」は「趙王」とし、詩では「使君」として登場する。中西進氏は、「古今注によるとこの求婚者は趙王であるといい、右の詩では使君（太守）であつて、これ又雄略作の『そらみつ 大和の国』の支配者と相等しい」と述べる。確かに、菜摘み女にわれな人物である天皇が求婚し素姓を聞くのは、「陌上桑」の桑摘み女に太守（或いは趙王）が求婚のために素姓を聞くことと共通しており、「陌上桑」の結末は採桑女の羅敷が拒否するが、巻頭歌ではわれなる者の名のりになつて終わり、その結末は異なるが、桑や菜を摘む女に男が求婚をすることで話が展開することは共通すると言える。

採桑説話と言えば「陌上桑」のほかに秋胡子の妻の話が有名であり、『西京雜記』、『列女伝』に見える。『列女伝』の「魯秋潔婦」の話を下に引用する。

潔婦者、魯秋胡子妻也。既納之五日。去而官于陳。五年乃歸。未至家、見路旁婦人採桑。秋胡子悅之、下車謂曰、「若曝採桑。吾行道遠。願託桑蔭下、滄下齋休焉。」婦人採桑不輟。秋胡子謂曰、「力田不如逢豐年。力桑不如見國卿。吾有金、願以與夫人。」婦人曰、「嘻夫、採桑力作、紡績織紝、以供衣食、奉二親、養夫子。吾不願金。所願、卿無有外意、妾亦無淫佚之志。收子之齋與筭金。」秋胡子遂去至家。奉金遺母、使人喚婦。至乃嚮

採桑者也。秋胡子慙。〔中略〕遂去而東走、投河而死。

秋胡子が妻を迎えて五日目に陳へ仕官するために出かけて、五年を経て歸郷する時に道ばたで桑を摘む婦人を見かける。「桑の木の下で一休みしないか、金を与えよう」と、桑摘みの婦人を誘うと、婦人は「両親に孝養を尽くし、夫の世話をすること理由に断つた。秋胡子が家に帰つて妻を呼ばせると、なんと先ほどの桑摘みの婦人が自分の妻で、秋胡子は恥じ入り、妻は夫の不孝や不義を戒めて河に身を投げて死んだという話である。『列女伝』には、さらに王が桑摘みの女に求婚する「宿瘤女」の話がある。

宿瘤女者、齊東郭採桑之女、閔王之后也。項有大瘤。故号曰宿瘤。初、閔王出遊至東廓。百姓尽觀、宿瘤採桑如故。王怪之、召問曰、「寡人出遊、車騎甚衆、百姓無少長、皆棄事來觀、汝採桑道旁、曾不一視、何也。」对曰、「妾受父母教採桑、不受教觀大王。」王曰、「此奇女也。惜哉、宿瘤。」女曰、「婢妾之職、属之不二、予之不忘、中心謂何。宿瘤何傷。」王大悅之曰、「此賢女也。」命後車載之。女曰、「頼大王之力、父母在内、使妾不受父母之教、而隨大王、是奔女也。大王又安用之。」王大慚曰、「寡人失之。」又曰、「貞女一礼不備、雖死不從。」於是王遣婦、使使者以金百鎰、往聘迎之。〔後略〕（同上）

三 中国採桑文学の形成

宿瘤女というのは、斉の東郭の桑摘みの女で、首に瘤があるので宿瘤と呼ばれた。後に閔王の后となる。話の内容は、閔王が彼女に求婚する話で、はじめ閔王が出かけた時に百姓がみな王を見にきたが、宿瘤女は桑摘みを続けており、王が不思議に思つて「なぜほかの人はみな仕事を投げて寡人を見にきたのに、あなたは桑摘みを続けるか」と聞いたら、彼女は「自分は父母の教えによつて桑を摘み、王様を見よとは教わつていません」と答えた。王は彼女を気に入つて後ろの車に乗せるように命じたが、女は「父母の教えを聞かず大王さまについていくのは駆け落ちの女であり、大王がなぜそんなことをなさるか」と非難すると、王は大いに羞じ、日を改めて礼を以て彼女を迎えたと言う話である。ここで宿瘤女は儒教の礼をわきまえた女として描かれているが、話の骨格は王の採桑女への求婚にあると思われる。

『列女伝』にある話は女性の貞節を称えるために儒教的理念に基づいているが、その根底には男(王)の採桑女への求婚があり、これこそ採桑説話の本質であると思われる。巻頭歌に戻つて考えると、男(天皇)が菜摘み女に家や名前を問うことで求婚を行う場面では、採桑説話の基本型を共有していると思われる。

採桑説話は採桑女に対する男の求婚、または男の挑発が中心をなしており、いわば採桑女と男の恋愛物語であると言える。このような桑摘みをモチーフとした説話や詩歌を合わせて「採桑文学」と言われる。それでは、採桑文学とはどのような背景の中に生まれたのであろうか。乾一夫氏は、「陌上桑」の祖型が民間歌謡にあるとして『陌上桑』にみる男女の会話のやりとりにはこの『歌垣』における男女の掛け合いの伝統が流れている⁸⁾と述べ、その源を男女の掛け合いを基盤に生成される民間歌謡に求めている。この乾氏の指摘は、中国の古代歌謡の生成を考えるのに重要である。

『詩経』の国風歌謡には、草摘み歌が多く詠まれている。白川静氏は「草摘みはもと神事として行われたものであった。草摘み歌における草は、神饌にせよ、薬草にせよ、何らかの意味で有効性をもつものであったであろう。それゆえに魂振りの意味もそこから生まれ、それらの詩がやがて歌垣歌ともなり、恋愛詩にも展開してくるのである⁹⁾」と述べ、草摘みはもと神事としてあり、神事を目的とした詩が歌垣歌、恋愛詩へと展開するという。神事を目的とした草摘みは『詩経』に見られ、その展開の上に恋愛歌謡があつたと見られよう。草摘みを詠んだ魏風「汾沮洳」は、次のように見える。

彼汾沮洳 言采其莫 彼の汾の沮洳、ここにその莫を采る。

彼其之子 美無度 彼其の子や、美なること度無し。

美無度 殊異乎公路 美なること度無し、公路に殊異なり。

彼汾一方 言采其桑 彼の汾の一方、ここにその桑を采る。

彼其之子 美如英 彼其の子や、美なること英の如し。

美如英 殊異乎公行 美なること英の如し、公行に殊異なり。

彼汾一曲 言采其蕢 彼の汾の一曲、ここにその蕢を采る。

彼其之子 美如玉 彼其の子や、美なること玉の如し。

美如玉 殊異乎公族 美なること玉の如し、公族に殊異なり。

これは汾水の辺で莫・桑・蕢を摘みながら、彼の人の美をほめる詩である。彼の人を「公路」「公行」「公族」と呼んでいるのは、身分のある男を指すものと思われる。歌は草摘みをしつつ、男を賛美することが繰り返して詠まれている。目加田誠氏が「これは桑つみ、草つみの歌、草つみの形は多くの場合人を思う文句を詠いおこす」と述べるように、女たちが草を摘みながら男性の立派さをほめる歌と考えられる。草摘みは人を思うへ興として、つまり草摘み、桑摘みは恋愛感情を興す媒体になっていると考えられる。同じく魏風の「十畝之間」には、次のようにある。

十畝之間兮 桑者閑閑兮 十畝の間、桑つむ者閑閑たり、

行與子還兮 行に子と還らんとす。

十畝之外兮 桑者泄泄兮 十畝の外、桑つむ者泄泄たり、

行與子逝 行に子と逝かんとす。

ここの「桑者」は桑摘み女を指すと思われる。境武男氏が「通りがかつた男がたわむれて、『つれてゆきたい』と桑つみの女にいう」と述べるように、男が桑摘み女を誘う詩であり、採桑説話の要素を持つていると言える。桑摘みと恋の思いを詠んだ詩は、次の豳風「七月」の二章から四章にかけて見られる。以下その部分をあげる。

七月流火 九月授衣 七月流火、九月授衣。

春日載陽 有鳴倉庚 春日載ち陽かに、鳴ける倉庚あり。

女執懿筐 遵彼微行 女は懿筐を執り、彼の微行に遵ひ、

爰求柔桑 春日遲遲 爰に柔桑を求む。春日遲遅たり。

采芣苢 女心傷悲 芣を采ること芣苢たり、女心傷悲す。

殆及公子同歸 殆くは公子と同一に歸かむ。

七月流火 八月萑葦 七月流火、八月萑葦。

蠶月條桑 取彼斧斨 蠶月桑を條とる。彼の斧斨を取り、

以伐遠揚 猗彼女桑 以て遠揚を伐り、彼の女桑を猗る。

七月鳴鵙 八月載績 七月鳴鵙、八月載績す。

載玄載黃 我朱孔陽 載玄にし載ち黃にす。我が朱孔だ

陽し、

為公子裳 公子の裳を為らむ。

四月秀萼 五月鳴蜩 四月秀萼、五月鳴蜩、

八月其穫 十月隕穽 八月其穫し、十月隕穽あり。

一之日于貉 取彼狐狸 一の日にここに貉し、彼の狐狸を取り、

為公子裘 二之日其同 公子の裘を為らむ。二の日それ同り、

載纘武功 言私其縱 載ち武功を纘ぐ。言にその縱を私に。

獻豸于公 豸を公に獻ず。

ここは、春日に桑を摘む女の心情が詠まれている。加納喜光氏は、

この二章に「春、うぐいす、桑摘みというモチーフから女性の恋が芽生え、その恋が、『一緒に帰る』から、裳にする糸を染める、『皮衣を作る』へと、展開し成就する様子を何気なくさしはさむ」と言

い、「小さな恋物語が暗示的に挿入されていて、しかもⅡ（Ⅱは二章、筆者注）の採桑と恋の場面は、後世の恋物語（『陌上桑』など）

の先蹤となつていようである」と、採桑説話の前蹤を「七月」詩

の採桑と恋の場面に求めている。採桑と恋愛の関係は「汾沮洳」「十

畝之間」にも見られることで、「七月」詩が必ずしも採桑説話の先蹤となつたとは言えない。というより、採桑説話を生成する基盤が『詩経』の国風歌謡にすであつたと言つべきである。

以上の詩は桑摘みと恋愛の要素とを抱え込むことで成立しているが、もとより桑摘みは集団的労働であり、そこに労働歌が歌われ、恋歌が展開することになるのだと思われる。鄘風「桑中」は、そうした事情を説明していると考えられる。

爰采唐矣 沫之鄉矣 爰に唐を采る、沫の郷に。

云誰之思 美孟姜矣 ここに誰をかこれ思ふ、美なる孟姜。

期我乎桑中 要我乎上宮 我を桑中に期し、我を上宮に要し、

送我乎淇之上矣 我を淇の上を送る。

爰采麦矣 沫之北矣 爰に麦を采る、沫の北に。

云誰之思 美孟弋矣 ここに誰をかこれ思ふ、美なる孟弋。

期我乎桑中 要我乎上宮 我を桑中に期し、我を上宮に要し、

送我乎淇之上矣 我を淇の上を送る。

爰采葑矣 沫之東矣 爰に葑を采る、沫の東に。

云誰之思 美孟庸矣 ここに誰をかこれ思ふ、美なる孟庸。

期我乎桑中 要我乎上宮 我を桑中に期し、我を上宮に要し、

送我乎淇之上矣 我を淇の上を送る。

詩は三章あり、唐・麦・葑を摘んでいる美しい女は誰を思っているだろうか、美しい女と桑中で逢う約束をし、我を上宮に迎えて淇水の辺に送ってくれたと詠む。草摘みは女の思慕を表す行為として

あり、「孟姜」「孟弋」「孟庸」は特定した人物ではなく、美しい女の代名詞であろう。「桑中」は「桑畑」であると考えられ、また詩句「期我乎桑中」から男女出逢いの場所であることは容易に判断できる。白川静氏は「淇水のほとりでは、歌垣がよく行われた。桑中も男女密会の地とされている。そこへの誘引の歌」とし、加納喜光氏は「古代歌謡の時代、桑ばだけは男女の恋のゲームとして行われる歌垣的な聖所とされた」と述べる。たとえば「桑林」について見ると、『呂氏春秋』順民篇に、「昔者湯克夏而正天下、天大旱、五年不収、湯乃以身祈禱於桑林」と、商湯の時に旱魃にあつて五年も収穫がなかったので、湯は自ら桑林で祈つて雨乞いをしたとある。また『呂氏春秋』慎大篇に、「武王勝殷人殷……立成湯之後於宋以奉桑林」（同上書）とあり、殷が武王によって滅んでから、その子孫が立てた宋は桑林を奉るとある。宋の「桑林」はさらに『墨子』明鬼に、「燕之有祖、当齐之有社稷、宋之有桑林、楚之有雲夢也、此男女之所属而觀也」と見え、燕の祖、齊の社稷、楚の雲夢と並べられて、そこは男女が集まり観る所だとする。

以上のように、「桑林」は雨乞いを行うところ、祭祀を行う神聖なところ、男女が集まるところであることが認められ、乾一夫氏は『桑林』もまた『商丘』『高桑』等と同一地か、さなくとも同様女性の媒神を祀った地であり、そこには男女が相会し、請子の行事が行われたのである。我国にいわゆる嬺歌的行為の行われた場所であ

つた」と述べている。また白川静氏は「桑林は聖地であり、そこでは歌舞が行われ、多くの巫女がおり、子授けのことも行われた。宋の桑林だけでなく、桑の木のある聖地には、そのような信仰や習俗があつたことも考えられる」と述べ、「おそらく桑林の社の歌舞は、その地の歌垣の習俗として定着していったであろう」（同上）と述べている。「桑中」はさらに『春秋左氏伝』成公二年に「又有桑中之喜、宜将窃妻以逃者也」と見え、「桑中之喜」は「妻を窃みて以て逃れんとすることからみると、それは人妻との駆け落ちへと展開したことが知られる。桑中の喜びというのは、桑中に現れる行為であることは言うまでもない。「桑中」「桑林」は祭祀を行う神聖な場所であると同時に、男女が集まって「桑中之喜」を求めるところであつたと考えられる。

『詩経』の草摘みに注目してみると、神事のために草摘みが行われた歌も見られるが、多くは恋愛がまつわり、さらに草摘みの場それ自体が恋愛の場へと展開し、やがて歌垣の場へと展開することが分かる。その歌垣の場において菜摘み女へ求婚する物語が誕生すると思われる、それはやがて採桑文学を形成していくが、採桑文学の本来的な姿は「桑摘み女への求婚」にある。「陌上桑」の羅敷という桑摘み女は男を弄ぶテクニクを持つものとして描かれており、男も太守または趙王として登場し、ここには王権社会の求婚物語が描かれるのだが、乾氏がいうように、「陌上桑」のその祖型は民間歌謡

にあり、『詩経』における民間の草摘みの場にみる求婚の伝統を引き継ぎながら楽府へと移入する時に、それは宮廷社会の物語へと昇華したのだと言える。つまり、祭祀・儀礼の菜摘みの場から生まれる菜摘み女への求婚物語が採桑文学へと発展したのだと言えるのである。

四 万葉集の菜摘みと恋愛歌

『万葉集』の巻頭歌は、菜摘みの乙女にわれなる人物、すなわち天皇が求婚する話であり、採桑説話の源にある菜摘みの型と同類にあると判断される。巻頭歌の前半は「歌垣や野遊びの場での男から女への求婚の歌」^①であると指摘されており、そうすると前半は『詩経』の菜摘み歌から「陌上桑」へと展開する類型の中で説明できると思われる。

『万葉集』の中に見える菜摘みの歌を見ると、たとえば、

① いざ子ども香椎の潟に白妙の袖さへぬれて朝菜摘みてむ（巻六・九五七）

② …… 阿胡の海の 荒磯の上に 浜菜つむ 海人少女らが
櫻がせる 領巾も照るがに 手に巻ける 玉もゆららに 白
栲の 袖振る見えつ 相思ふらしも（巻十三・三二四三）

の歌では、食用の海藻である朝菜、浜菜を摘むことが詠まれている。また、

③ 春の野にすみれ摘みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける（巻八・一四二四）

④ 明日よりは春菜採まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ（巻八・一四二七）

⑤ 春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野のうはぎ採みて煮らしも（巻十・一八七九）

に見える③は若菜摘みの行事へ参加しての歌であり、④は春の若菜摘みの行事の準備が詠まれている。⑤の春日野は遊楽の場所であり、うはぎを摘んで煮ているのは、おそらく菜摘みの神事が行われているからであろう。さらに以下の歌には、若菜摘みの女性への思慕や恋心が詠まれている。

⑥ 国栖らが春菜採むらむ司馬の野のしばしば君を思ふこのころ（巻十・一九一九）

⑦ …… 少女らが 春菜摘ますと 紅の 赤裳の裾の 春雨に
にほひひづちて 通ふらむ 時の盛りを 徒に 過し遣りつ

れ 偲はせる 君が心を 愛はしみ この夜すがらに 寝も
ねずに 今日もしめらに 恋ひつつぞ居る(巻十七・三九六
九)

⑧…… 春の野に 莖を摘むと 白妙の 袖折り反し 紅の
赤裳裾引き 少女らは 思ひ乱れて 君待つと うら恋ひす
なり 心ぐし いざ見に行かな 事はたなゆひ(巻十七・三
九七三)

⑥は、国栖らが春菜を採む司馬の野でしばしば君を思うというよ
うに、春菜摘みは男を思う句を起こしている。⑦⑧は家持と池主の
贈答の歌で、少女の春菜摘みを通して相手を思う心を起こしてい
る。⑧は池主の歌で、家持の春日の表現を受けた歌で、「春の野に
莖を摘むと…思ひ乱れて」と、菜摘みが人を思う、心を起こさせて
いる。二人の友情を示すのに、恋を導く菜摘みが意図的に用いられ
ているのである。そして次の、

⑨春山の咲きのををりに春菜つむ妹が白紐見らくしよしも(巻
八・二四二)

⑩難波辺に人の行ければ後れ居て春菜採む児を見るがかなしき
(巻八・一四四二)

⑪君がため山田の沢に恵具採むと雪消の水に裳の裾濡れぬ(巻

十・一八三九)

⑫あしひきの山沢恵具を採みに行かむ日だにも逢はせ母は責む
とも(巻十一・二七六〇)

⑬伎波都久の岡の荃葦われ摘めど籠にもたなふ背なと摘まさ
ね(巻十四・三四四四)

の歌では、菜摘みと恋愛の関係が緊密である。⑨は、春菜を摘む妹
の白い紐を見るのはいい気分だと詠み、⑩は留守をして春菜を摘む
女がいとしいと詠むように、春菜摘みの女に対する恋情が直接的で
ある。⑪は「君がため」に恵具を摘むと歌い、恋する人への贈物で
ある。⑫は山の沢の恵具を摘みに行く日だけでもお逢いくださいと
詠み、恵具を摘む場が男女の出会いの場としてあることが窺え、⑬
も若菜を背と一緒に摘むことを求める歌である。

以上の歌からみると、菜摘みは春の行事として行われていたこと
が知られ、さらにそこは恋情と男女の出逢いが可能な場であったこと
が窺われる。そうした菜摘みの場が、神事を背景とした説話を成
立させていたことも窺われる。『万葉集』巻十六に載る「竹取翁の歌」
の序文によると、

昔老翁ありき、号を竹取の翁と曰ふ。この翁、季春の月に丘に

登り遠く望むに、忽ちに羹を煮る九箇の女子に値ひき。百嬌儔

無く、花容匹無し。時に娘子等老翁を呼び嗤ひて曰はく「叔父
来れ。この燭の火を吹け」といふ。ここに翁「唯唯」と曰ひて、
漸に趨き徐に行きて座の上に着接る。良久にして娘子等皆共に
咲を含み相推譲りて曰はく「阿誰かこの翁を呼べる」といふ。
すなはち竹取の翁謝へて曰はく「慮はざる外に偶に神仙に逢へ
り、迷惑へる心敢へて禁ふる所なし。近く狎れし罪は、希はく
は贖ふに歌をもちてせむ」といふ。(巻十六・三七九一番歌序)

とある。翁が季春の月に丘に登り遠望すると、羹を煮る九人の女子
に出逢う。女子たちは翁に燭の火を吹いて欲しいと頼みながらも、
誰がこんな年寄りを呼んだのかとからかう内容である。長歌(巻
十六・三七九)では、生まれた頃は母に抱かれ、お襦袢に包まれ
た幼子の時には、木綿の肩衣を着て、あなた方と同じ年頃には、真つ
黒な髪を立派な櫛ですき垂らし、束ねてあげたり巻いたりし、華や
かな衣を身につけていたのだと歌い、さらに稲置の女が求婚の印に
贈ってくれた綾の靴下を穿き、親に妨げられて逢い難いという少女
が贈ってくれた立派な帯を身につけ、私が出歩くと宮女も宮人の男
たちも振り返って私を見たものだという、青春時代の華やかに過ご
した時を誇る内容である。最後は「古の賢しき人も 後の世の
鑑にせむと 老人を 送りし車 持ち還り来し 持ち還り来し」と
歌う。これは孝子伝にある原毅の話、棄老伝説を引用し、老人を尊

敬すべきだ勧める内容である。反歌では、生きていれば必ず白髪が
生え、あなた方にも白髪が生えたなら、今の私のようにきつと若者
から馬鹿にされるだろうといい、女子らに敬老の心を持つべきこと
を教訓として示し、戒める内容となっている。これに答えた九人の
女子らの歌が続いている。

愛しきやし翁の歌に鬱悒しき九の児らや感けて居らむ 一(巻

十六・三七九四)

辱を忍び辱を黙して事も無くもの言はぬ先にわれは寄りなむ

二(三七九五)

否も諾も欲しきまにまに赦すべき貌見ゆるかもわれも寄りなむ

三(三七九六)

死も生もおやじ心と結びてし友や違はむわれも寄りなむ 四

(三七九七)

何為むと違ひはをらむ否も諾も友の並々われも寄りなむ 五

(三七九八)

豈もあらじ己が身のから人の子の言も尽さじわれも寄りなむ

六(三七九九)

はだ薄穂にはな出でそ思ひたる情は知らゆわれも寄りなむ 七

(三八〇〇)

住吉の岸野の榛に匂ふれど匂はぬわれや匂ひて居らむ 八(三

八〇一)

春の野の下草靡きわれも寄りにほひ寄りなむ友のまにまに 九
(三八〇二)

三七九四番歌では「九の児らや感けて居らむ」と、九人の女子は老人の歌に感動したと歌い、三七九五番歌では「われは寄りなむ」と老人に心を寄せることを歌い、以下三七九六〜三八〇〇番歌も「われも寄りなむ」と言い、三八〇一番歌では「われや匂ひて居らむ」と、老人の心に染まることを歌い、最後の三八〇二番歌では「われも寄りにほひ寄りなむ友のまにまに」と、私も仲間と一緒に老人の心に染まろうと歌う。この反歌について、橋本四郎氏が、

第九首の初句「春の野」は、詞書の「季春之月登丘」に対応する。：第二句の「下草靡き」は、第七首までのリフレイン「われも寄り」を引き出すためだけではなく、野遊びの場における婚姻の成立を暗示する。⁽²³⁾

と述べるように、竹取翁の歌物語には野遊びの場における翁と菜摘み女との婚姻が認められ、ここには菜摘み説話と呼び得る要素を含んでいると考えられる。

この竹取の翁とは何を指すのかについて、櫻井満氏は「稀人の資

格にたつて⁽²⁴⁾訪れたとし、伊藤博氏も「稀人であった⁽²⁵⁾」と言う。廣田律子氏は、中国少数民族の仮面劇に登場する土地神に注目して、「祭りの場に、翁が現れ、自分の出自を明らかにし、古を語るといふ情景は、『万葉集』の竹取の翁の歌にもつうじているといえる⁽²⁶⁾」と言い、「竹取の翁とは、竹を神聖視する竹採り集団を中心として営まれる春の祭りに現れた、祖先神であり土地神であった」(同上)と述べた上で、「中国の土地神の語りは折口信夫が考えていた五穀豊穰と人々の繁栄を言祝ぎ、予祝を行う呪言を述べる『翁』の言い立てに通じるものがあると考えられます⁽²⁷⁾」と指摘している。折口信夫氏は、翁という存在について、その為事を仮に「語り」「宣命」「家・村ほめ」にあるとして、

其中心は、勿論宣命にあるのです。でも、此三つは皆一つ宣命から分化した姿に過ぎないのです。

常世神ののりとおきましては、神自身及び精霊の来歴・種姓を明らかにして、相互の過去の誓約を新たに想起せしめる事が主になつてゐました。(中略)翁の語りは次第に、教訓や諷諭に傾いて来ましたが、尚、語りの中にすら、宣命式の効果は含まれてゐたのです。⁽²⁸⁾

と述べる。竹取の翁は長歌で自分の経歴を歌うが、これは神の来歴

を述べることであり、最後に敬老を勧めるのは翁の語りが教訓に変わったことを意味し、ここに登場する竹取の翁は「まれびと」の姿と合致していると言える。

竹取翁の歌は、菜摘み説話的要素を含みながら、そこに翁が登場するのは、菜摘みが神事的要素を持つていたからだと言える。長歌で翁は自らの経歴と教訓を以て名告りをしたのであり、これは「まれびと」の名告りと祝福にあたる。予祝行為としてかまけわざが行われ、それが求婚の形式として現れている。このような竹取翁の歌の物語性には、菜摘みの場に「まれびと」が登場し、予祝の神事としての求婚が行われているのは、そこに村の民俗行事が存在したからだと推測される。

一方、巻頭歌は「われ」なる人物、すなわち「天皇」が丘に登場し、若菜を摘む女性に求婚し、名告りで終わっているが、ここには竹取の翁の歌と発想などを等しくしている。「われ」なる人物は、春の若菜摘みの場に登場する「まれびと」の性格を有しているが、それが倭の王、すなわち天皇へと向かったのが『万葉集』の巻頭歌であった。

五 おわりに

『万葉集』の巻頭歌は、雄略天皇が菜摘みの女に求婚を行う場面

から始まるが、その背後には、中国の採桑説話との類似性が指摘されてきた。中西氏の、

採桑説話の源には、擬えていえば『菜摘み説話』ともいうべきものがあつたと考えられるのであつて、これが雄略の巻頭歌の背景であつたらうと考えるのである。「中略」樂府が民謡から材をとつて新曲を作つたものたる事はいう迄もないが、同様の経路は万葉にもあつたであろう。詩経より樂府へという経路は民謡より巻頭歌への経路と全く等しいものであろう。⁽²⁾

というのは、以上に縷々述べてきたことから、肯定すべき指摘である。また「採桑説話的民謡が樂府詩の影響を契機として、宮廷に天武、持統の頃に蘇生し、雄略の人間像と結びついて出来上つたものといえよう」(同上)というのは、天武朝の国風への関心を示唆するものであり、初期万葉の成立する状況が考えられる。

注

(1) 引用は、中西進『万葉集 全訳注・原文付』(講談社)による。以下同じ。

(2) 鎮魂歌説——折口信夫「万葉集講義」『折口信夫全集』第九卷所収(中央公論社)。

倭の県の献菜の儀礼説——林屋辰三郎「大和」『万葉集大成』風土篇(平

凡社、一九五五年)、土橋寛「国見歌とその展開」『古代歌謡と儀礼の研究』(岩波書店、一九六五年)、白川静「巻頭の歌」『初期万葉論』(中央公論社、一九七九年)、坂本信幸「巻一卷頭歌群の意義」『国語と国文学』第六十巻第二号、(一九八三年二月)。

聖婚歌謡説——西郷信綱「日向三代の物語——聖婚」『古事記の世界』(岩波書店、一九六七年)、阪下圭八「聖婚・歌垣・国見」『初期万葉』(平凡社、一九七八年、初出は「伝統と現代」一九七二年五月号)、櫻井満「巻頭歌の意義——儀礼と神話の間——」『万葉集研究』第十集(塙書房、一九八一年)、松原博「万葉における巻頭雄略歌の論(一)——古代王権と聖婚について——」『美夫君志』第二十六号(一九八二年三月)、辰巳正明「神に等しい者」スメロキ」『詩霊論』(笠間書院、二〇〇四年)と、「天子非即神と反天皇論」『折口信夫 東アジア文化と日本学の成立』(笠間書院、二〇〇七年)など。
求婚の歌曲説——池田勉「『万葉集開巻第一の歌』をめぐる」『万葉集』III(有精堂、一九七七年所収、「成城文芸」第十二号、一九五二年初出)、佐伯有清「雄略天皇と万葉巻頭歌」高岡市万葉歴史館論集二「伝承の万葉集」(笠間書院、一九九九年)。

歌垣の場における求婚説——井手至「『万葉集』巻一卷頭歌の位相とその解釈」『古代文化』第二十四巻四号(一九七二年四月)、森淳司「雄略天皇——万葉巻頭歌の論——」『万葉の歌人たち』(武威野書院、一九七四年)、木村康平「万葉集巻一卷頭歌の成立」『帝京大学文学部紀要国語国文学』十四(一九八二年十月)など。

演劇の場における舞踊の歌詞説——鴻巣盛広『万葉集全釈』(広文堂)、石母田正「古代貴族の英雄時代」『論集史学』(三省堂、一九四八年、『石母

田著作集』第十巻、岩波書店所収)、田辺幸雄「雄略天皇」『初期万葉の世界』(塙書房、一九五七年)、西郷信綱「雄略天皇」『万葉私記』(未来社、一九七〇年)、本田義寿「万葉集巻頭歌の芸術的側面」『論集日本文学・日本語1上代』(角川書店、一九七八年)など。

(3) 「雄略御製の伝誦」『中西進万葉論集』第一巻(講談社、一九九五年)、なお初出は「万葉」四十二号、一九六二年一月。

(4) 『楽府詩集』(中華書局)。

(5) 『楽府詩集』による。なお「十五府小史」の「史」はほかの本と照らして「吏」に訂正した。書き下し文は新釈漢文大系『玉台新詠』(明治書院)を参照した。

(6) 注3。

(7) 荒城孝臣注解『列女伝』(明德出版社、一九六九年)による。

(8) 「採桑文学にみるエロチシズムの原理——空桑から採桑へ。『高唐賦』『神女賦』に及ぶ」『古典評論』五、一九六九年。

(9) 「草摘みについて」『中国古代の民俗』(講談社、一九八〇年)。

(10) 白川静訳注『詩経国風』(平凡社、一九九〇年)による。書き下し文はこれに従った。以下同じだが、魏風「十畝之間」は新釈漢文大系『詩経』を参照した。

(11) 『中国古典文学全集 詩経・楚辞』(平凡社、一九六〇年)。

(12) 『詩経全釈』(汲古書院、一九八四年)。

(13) 中国の古典18『詩経』上(学習研究社、一九八二年)。

(14) 注9。

(15) 注13。

(16) 『呂氏春秋』(明德出版社)。

- (17) 新釈漢文大系『墨子』(明治書院)。
- (18) 注8。
- (19) 「桑摘みの女」『中国古代の民俗』(講談社、一九八〇年)。
- (20) 新釈漢文大系『春秋左氏伝』(明治書院)。
- (21) 森淳司「雄略天皇―万葉巻頭歌の論―」『万葉の歌人たち』(武蔵野書院、一九七四年)。
- (22) 注1。
- (23) 「竹取翁の歌」『万葉集を学ぶ』第七集(有斐閣、一九七八年)。
- (24) 「巻頭歌の意義―儀礼と神話の間―」『万葉集研究』第十集(塙書房、一九八一年)。
- (25) 『万葉集釈注』(集英社)。
- (26) 「翁の発生―中国江南の戯劇から―」『文学・語学』第一七三号、二〇〇二年三月。
- (27) 「来訪する鬼と翁」『折口信夫・釋道空―その人と学問―』(おうふう、二〇〇五年)。
- (28) 「翁の発生」『折口信夫全集』第二卷(中央公論社)。
- (29) 注3。